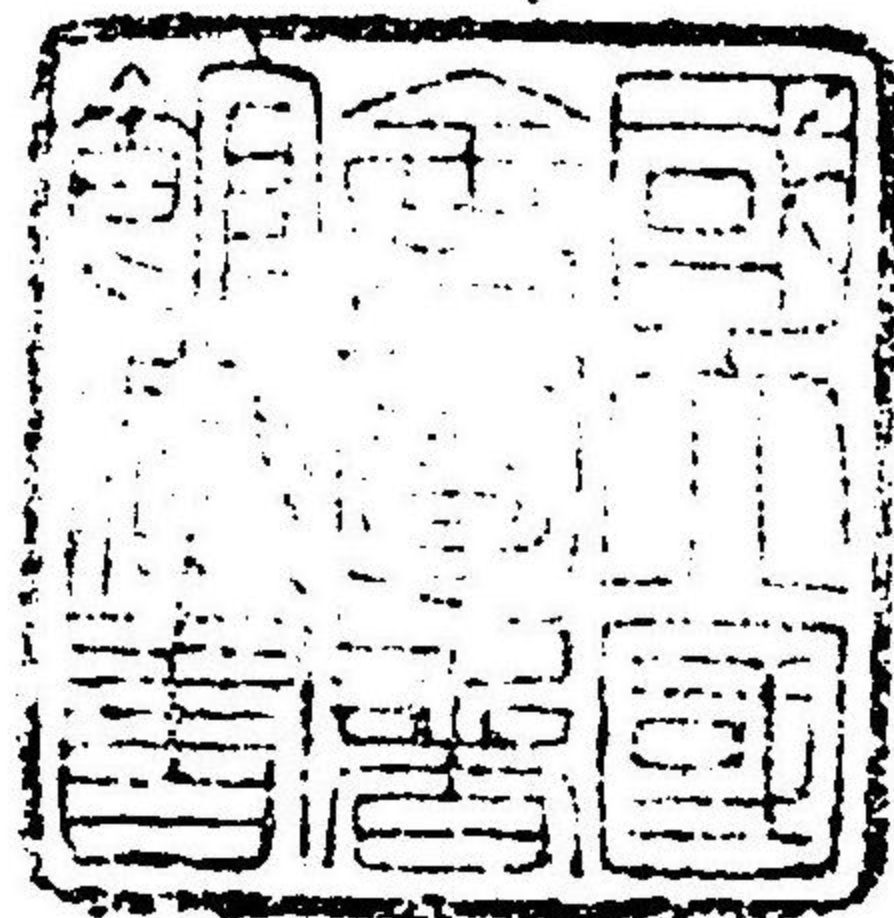


奥羽觀蹟聞老志

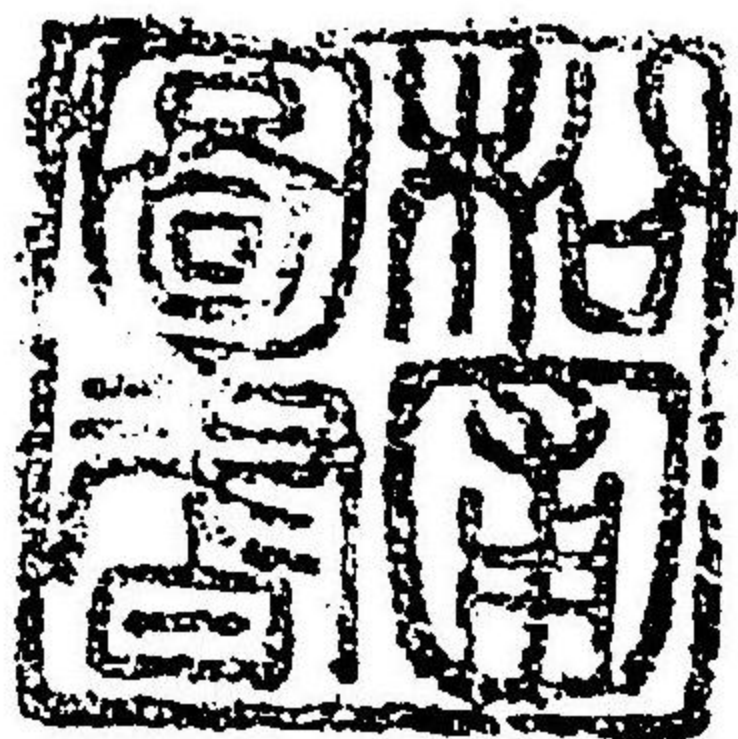
十三

291.2

Sa53/a



348447



奥羽觀蹟聞老志卷之十一上

仙臺 佐久間義和著

名稱類外集

此篇在吾太守封疆之外得稱名地勝蹟者復采古歌及諸家之說輯備參考矣然以地理方隅之不詳而未遑盡分郡縣村落云

伊達郡

阿津賀志山 事迹考作厚樫山

在貝田驛東光明寺村邊事詳刈田關門下

東史曰後鳥羽帝文治五年七月十九日賴朝卿

帥數千騎發鎌倉赴于陸奥國欲征藤泰衡也泰
衡構要害于前途以異母兄錦戶國衡將二万兵
守伊達郡阿津賀志山構五丈湟于阿津賀志國
見宿間濺逢隈河流令金剛別當父子將千餘騎
以拒幕下

國見澤

國見山尤大高山聳路西其下乃國見澤也國見
宿者乃今貝田是也

同年八月七日賴朝卿到伊達郡國見澤
葛松原

在桑折驛西松原村北或曰笠石松林也

夫木集

西行法師

よの中の人よと葛の松原とよはるゝ名社う
此志のりは此

阿武松原 一作逢松林

在桑折驛東南筥崎村正東

皇后宮おて人々戀歌のりふまつりける時
よめる

金葉戀下

太宰大貳長實

あちのくのおもひ志のよに在かり心にか

りるあふのまはせら

あふの松原陸奥又はりま 又つくし

夫木集

正三位季能卿

はりまろと恨ても猶た乃むとや末ふありて
ふあふの松原

抑關

在桑折驛北泉田村西南謂之繁純山山下乃往
昔關址也

家集關路歸雁かさへの關陸奥

夫木集

源 仲正

雲路ふもれさへ此關のあらませはやすくは
雁比のへらさぬまし

同

よみ人志ぬ

稀に來る戀も川きぬにひたきゆを人をれさ
への關もすへなん

抑池

繁純山下有池塘是乃抑池也 右兩區在五造郡
同名事詳其下

題あらすみちのく よみ人志ぬ

たもへとも人目をほむかみそこをおさへ
乃池をありぬへき哉

憩休松

在貝田驛西往昔實方中將東行倚此松根而憩
息之地也古松猶存

下紐關 伊達大木戸

在貝田驛西南國見山下往古有關門禦人土人
曰之伊達大木戸

新續古今

左大將公名

立るへり又やへとてんこよひさへ心もと
ぬ下ひも乃關

六百番

季經朝臣

あひ見志を思ひかたむる中なれやうをとけ
あゑき下ひも此關

橋爲仲朝臣みちの國の守ふてをとりける
に大皇大后宮乃大盤所よりきてとれとは
かくて

詞花別

太皇大后宮甲斐

東路乃遙々此道を行先くりいづらとをへれ
きたひもの關

新後拾遺戀一

大中臣能宣

現とも夢とも見えぬ程はありりよはゆ

せ下紐の關

信夫郡 一作篠生

先代舊事本記曰信夫國造志賀高穴穗朝乃十代景御世阿支國造同祖久志伊宇命孫久麻直定賜國造

天皇本記二十三代清寧帝五年二月天皇詔以物部木蓮子連遣東海陸奧諸國分大國出州分大郡出縣自陸奧出津輕會津篠生出羽定捺國造規鬃縣主別紛宮田首田分別弗慥屯倉至此御代國事分明

天孫本紀猿田彦大神奉兩命即考慇懃肯御矣將八十武神發於五瀨國踏動八雲路光耀鳴震以至於篠忍岡

四十四代元正帝養老二年夏五月乙未割信夫等五郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國信夫郡人外正六位上文部大庭等賜姓阿部信夫臣同郡人外從八位下吉禰侯部足山等七人賜姓上毛野歛山公同郡人外初位上吉侯部廣國賜姓下毛野靜屈

五十四代桓武帝延暦元年五月乙酉陸奥國、人外
大初位下安倍信夫、朝臣東麻呂等獻軍糧、授外
從五位下

五十三代淳和帝天長七年十月己未山階寺、僧
智典造建陸奥信夫郡寺一區、名善提寺、預定額
寺例

五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未陸奥國信

夫郡擬主張大田部月麻呂賜姓阿倍陸奥臣

神名帳曰信夫郡五座大一座 小四座鹿島神社

黑沼神社 東屋沼神社名神大 東屋國神社

白和瀬神社

歌林良裁おみちのくの信夫郡にもちすりと
てかみをみたしふるやうにそりたる物と云
のふもちすりといふあり

千載集右大將兼長春日の祭の上卿に立侍と
る供に藤原の範綱々六位に侍とるふと乃み
そり比狩衣をきせと侍とる

東史曰藤基衡贈信夫毛地摺千端于佛工雲慶
云

故事談神社部云宗形宮内卿入道師綱陸奥守

にて下向の時基衡押領一國如無國威仍奏聞
事由申下宣旨擬檢任國中公田之所忍郡者基
衡藏之先不入國使而今度任宣旨擬檢任之
間基衡件郡地頭犬莊司季春以合心志く禦之
國司猶帶宣旨推入之間已以放火及合戰畢守
之方被疵者巨多基衡の志は志此共背宣旨
討國司事依恐存招季春云依無先例雖追返國
司背宣旨之條非無違勅之恐いかにいれど
云云季春云今仰は兼而皆存知事也主君之命
依難奉背於一矢者射候畢然者君者不知食之

體にて己れり頸と召可被進國司之許也其上
は定無爲に候歟云云基衡乍拭涙諾えて基衡
り於守云基衡一切不知事候郡地頭凡俗無先
例自由之狼籍候於今者不及子細季春すてに
召取畢早賜御使於其前可勿頸云云依之國司
遣檢非違使所目代季春已持出たり四十餘計
乃男肥滿美麗あるの積を雁水干小袴に紅葉
と着たり打物取たる者二十人計圍遠之切手
と氣仙の彌太郎と云者也出立擬切頸之間犬
莊司云切損給な刀は何れと問けきは切手云

日比次郎太夫の大津越を云け此は叔は心安と云ひひらきら此より部類五人同切之
大津越とは人を引そへく切るよ左右の臂のうへと中骨不懸切を云也基衡季春を惜て我は不知之様にて猥に構女人之沙汰之體再三遣妻女と國司館乞請を誘けり其請料物凡不可勝計沙金も一萬兩と云云守不聽之遂切畢云云

一日讀故事談得信夫郡犬莊司季春忠死之一事慨然泣血如雨嗚呼季春真之忠臣也基

衡又何心耶欲免己之罪惡而行一不義殺一不辜於己則苟偷生免死而安顏厚焉不義無道孰甚焉宜哉子孫遂為烏有赤其族也然季春之忠死世未嘗知之唯無沒于冊子中於是甚恨之然幸其事實在此書舉之以旌彼忠誠于世識者念茲

藻鹽草第二時節部云興州信夫郡よは今年のことをも刈りてのりやと刈りてふれはえめそれちこもをわると云
按此地産黃鴈見能因歌

信夫

女のもとよまかりるにはやのへりねと
れみいひとれは

後撰戀三

よみ人いふは

川れなれをおもむきのさねか川はて
はくるをいといなりなり

皇后宮あて人々戀歌川りうまほりなり
よめる

金葉戀下

太宰大貳長實

あまれく乃おもひしのふよありあうら心に

千載戀一

大中臣定雅

りゝるあふのま川はあ
我床はあふのそくのますと原露かゝりと
もしるむとそなき

新古今秋上

前右大將頼朝

とちのきのいはくこ乃ふははそあふぬ如き
川をこてよ壺乃石文

續拾遺戀一

爲家

いかに夢む戀ははてあきあまのきのしのふ
はうりにあはてやみあむ

玉葉戀一

家隆

いかにしてゆきてみされんみちのくの思ひ
志乃ふのおるもへにけり

同

源三位行能

身に阿まるれもひやそらに兄ちのくれ志の
ふらひなく立はふりりな

新千載秋上

從三位爲子

秋かせにみよれおたりを陸奥のこのみよは
阿良ぬ萩の花はり

夫木

能因法師

陸奥の志のよ乃たりを手に巻てあさちの
原せゆまはさる子か

續古今

中務卿親王

あさちのくの志れふのたかの冬こもりかりに
もあさしれもよあゝろを

信夫奥

千載戀一

大中臣定雅

わか床は志のふのせを乃眞管原露かゝりと
もあさる人乃あき

千五百番歌合に

續後撰戀一

前大納言忠良

跡たけぬ誰に問ましとち乃くの思む志のふ
れたくれかよむ路

文治三年百首歌の中に

新後撰春下

定家

尋はや志のふ乃れをのさをらそなりせに志
ふれぬ色やのまると

治承二年太政大臣家歌合

夫木春

俊成

惜れりかされかきをぬんみちのくのこのふ

のをくの字くひす乃聲

論三種菩提心行影心

同尺歌

西行法師

おもえははえのふ乃れをへ來ま志やはこは
りたかり志白河の關

六百番歌合

家隆

おもひやる心はくゑの嶺おほて志のふのお
ををたけね入らむ

行意

陸奥のしのふ乃山のれくをてもれな志とふ

おそ春は立らん

信夫山

福島驛北突兀峯巒是所謂信夫岳也上建羽黑
權現神祠群山相峙層嶺相連

むろ志陸奥國おてあて字ことおれ人の光
に如よむけるに何やしうさやうよてもあ
るをれ女を何れす見えげれは
新勅撰戀五載之詞書みちのくにまかり
て女につ戀かはしけると有之

伊勢物語第十五

業平朝臣

しのお山忍むてりよみ道もいな人のくろ

のれくも見るへを

暮間郭公といへるこゝろをよ又侍らる

千載戀

二品法親王守覺

ほとゝけす猶は川こゑとさのふ山夕ある雲
れそこにあをあり

同戀二

祝部成仲

君戀ふる涙をくれと降ぬれはこのふの山も
色川にけり

同

三條院前常陸

いかにせむ志のふの山の下紅葉をるゝま

くみ色乃まさるを

春日社の歌合に落葉といふこととよみ奉
り志

新古今冬

七條院大納言

はつちくれ志のふの山の紅葉はと嵐ふれと
たますや有けむ

忍戀のこゝろと

同戀二

清輔朝臣

人しきすくる志きものは志のふ山下はふ葛
乃うらみありなり

同

和歌所歌合よ忍戀れおゝろを

雅經

きえねぬゝしのふれ山の岑の雲りゝることゝ
るれ跡のあきまで

千五百番歌合お

通光

限りあれ志のふの山の麓にも落葉り上の
露そ色つを

刑部卿頼輔歌合と侍とるによみてつゝは
あける忍戀

新勅撰戀一

俊成

いりおちて忘るへかくとも尋みん志のふれ
山のれくのゆよひ路

同雜四

寂蓮法師

しれふ山木れ葉とくる、下草にあらはれわ
さる露の色わか

洞院攝政家春百首歌よ忍戀

續後撰戀一

入道攝政左大臣

道絶くこの身にふりれ志れ山心のおくを
ある人もあふ

題忘らま

續古今冬

中納言

冬さむみ志のふ乃山の谷水は音にたぐす
さそ氷るらん

同戀一

定家

戀わひぬ心乃れく乃一のふ山露も志くまも
色に見せま

寄雲戀といへるまゝろを

續拾遺戀一

高階家成

いはてのみ志乃れ山にるる雲や心れれま
と猶へたけらむ

新後撰秋上

寂蓮法師

おもひあまる心の程もけあゆ也信夫の山の
さをさりの聲

同戀一

兵部卿有教

我からぬ忍ふれ山の松乃葉も年経て色も出
るもれは

同三

光俊朝臣

し乃山岩根の枕やはす共下ゆく水のも
さすもな

續千載夏

皇后宮

よはねはやふの山の布とゝ死す心のれ
冬のことやわると

同秋下

關白内大臣

露しく純いかにちてり志のふ山木木のこ
のはの色も出らん

光明峯寺入道前攝政家の三十首歌の中

同戀四又續後拾遺

山階入道左大臣

恨くも戀ても露そこをれける志のふの山の
葛の下りせ

同雜下

前大僧正良覺

我なりぬ心の海も見るさかりな乃ふれ山よ
宿もとめてむ

新千載戀一

典侍親子朝臣

川ぬりらむ心れおをち見てもうとよなやを
のふの山の通路

同雑上

源 頼遠

誰ふあを志のふれ山乃ほぎときを心のおく
のふとあたるらむ

新拾遺戀一

土御門院小宰相

もらすへき隙こそあけれ忍ふ山志れむてか

よふとふれ下水

同

兼好法師

志のふ山又あとかたに道もかなふりぬるあ
とは人もこそ志れ

同

俊 成

人志れぬ思ひ志れふの山風に時そともなき
露そあふるゝ

同三

権大納言宣明

此暮も音よなたくそ忍ふ山心ひと川の嶺乃
まの如摺

建保三年名所三百首

新後拾遺春下

定家

岩川と志んはてや染るこの山心のおくの
色をぬはねて

貞和二年百首歌

同戀一

前大納言爲定

通む路のあきまつれてそ忍山つらき心のお
をは見ゆけり

同

明魏法師

志ん此志あ忍ふ此山此初志くれ心乃おをよ

そむる紅葉は

同

前大僧正義運

行かよみ心あれはとあをさえていとゝしの
ふ乃山乃下とち

同

前大僧正滿意

隙そあれえれふ乃山の夕時雨いとく年ふる
袖のなえたよ

同二

俊成

尋いぬん道も志んきぬ忍み山袖はりりこそ
志ん成けれ

左兵衛督直義

宇ちをくる心のれくも見ぬ日になのふの
山をへとて成たり

名所百首歌合

順徳院御製

都には花もちりあへはみちのくればふの
山は春風れ頃

同

家隆

人とはぬ軒れ志乃ふの山乃端に花の色とあ
く春雨そふる

建久二年左大將家歌合鳥部

定家

このふ山あさちのれくまかふわこのそれは
そりりや人あふるゝ

藻塩草鳥部と山の鶯

忍ふやまおさはのおくまわりわなれ花の
羽そりりや人あふるゝ

跡見えてきりふまのこるえをひあせとや
ある己この人となもえ

まさはよまはねをならふる鳥もあふ上
見ぬ鶯の雲の通ひち

御集

夫木集

中務卿等

しのみ山霞の内乃字くひすも人お忘れぬ
音をや鳴らん

同

皇大后宮太夫俊成

をのれの足春とやむとりをれふ山花おこも
れるうをひまのこを

建保三年名所百首

同

順徳院御製

あげやあけ志のふれ山れよみこ鳥川るはと

まふぬ春あらすとも

同

正三位家衡卿

志のみやまあたれて花はほころひぬ限を
れぬ句ふはるうせ

同

正三位知家卿

歸るありお志む心のれをよまき志のふれ山
に道をたつねて

同

從三位家隆卿

春ふりき忍みの山乃岩つゝあいはねと色に
あるき頃哉

百首歌思絶戀まのふ山 信夫郡

同

民部卿爲家

人志きす通ひえ跡は志のふ山をけりはてた
る道芝れゆ

古今詞百首

同

隆祐朝臣

うへに見ぬ思むの色の志た染あふに志の
ふの山のを志あし

同

建長七年顯朝卿家千首歌合寄梨戀

信實朝臣

戀ふるまはくる志き物をよの中にあはれ志
れふの山あ志のはあ

千五百番

同

参議雅經卿

ふゆねはや五月とすともほととけす志のふ
れやまのおまの一聲

文治六年五社百首照射

同

皇太后宮太夫俊成

ますらをは鹿に心せゆけりや志のみのや
まに夜とあかいらむ

同

從三位家隆卿

ともしはる人やとるらん忍み山志乃むて
よみおきのれもむを

寶治十首歌合忍久戀

同

山階入道左大臣

志たにれと忍ふ乃山のいはあまといはてれ
もひの年そへにけり

洞院攝政家百首

同

俊成卿女

そのあしやと乃みれ山のゆふけより見え
む後のあまの志は雲

平政村朝臣

秋來きは忍ふれやまよ鳴鹿も人にさるれぬ
妻やあふらん

文治二年百首

前中納言爲家卿

このみやますそ野の薄いろはより秋れ盛を
れもむわふらん

千五百番

寂蓮法師

思むあまる心は程も聞ゆ也し乃みの山のさ
をさりの聲

元文六年小野宮歌合忍戀

同

從三位家隆卿

谷川のおほるみ川にて忍ふ山猶うき物を松

のゆみりせ

寶治十首歌合

同

大藏卿有家卿

我ならぬとのふの山の松の葉も年へて色に
出る物りそ

歌枕

家隆

歸る雁惜む心乃れをもされ志のふの山に紅
葉さゆ糸て

拾玉

慈鎮

いかにせむ忍ふれ山お跡たはて思ひいれを
も露なるもるん
いぢあせむ忍ふの山をこほかねくりへるみ
ちには又まよひぬる

定家

戀託ぬ心れおをれ忍ふ山露も時雨も色を見

せふと

玉吟

家隆

ちあすあよいまのちのちの春霞しのふのや
ま乃花の木末は

建保百首

範宗

春深れ忍ふの山の岩のしいはねと色にし
るきおころと

康光

このふ山嶺のさをあやちりぬらんふるすに
あへる谷に鶯

六百番歌合

兼宗

戀ゆへに憂世をすてゝかきおはふのふれ
やまや住家あるへき

隆信

夢をたあまたふみも見ぬ忍ふやまふりき戀
路せいつて尋ん

信夫里

友則あむす先みちの國へまわりけるに
うはあけり

後撰別

藤原滋幹女

君をれみしのみ乃里へゆくものを會津の山
此遙なきやなせ

新古今秋上

橘爲仲朝臣

あやあをむくもぬよひをいとふりあ志の
ふ乃里の秋の夜乃月

新勅撰戀一

西行法師

東路のこれふの里にやにぬむて名社の關を
こえそとつぬふ

續後撰戀一

俊成卿女

いりよせむ忍ふの里に跡たえておもひ入と

も露のゆるさぞ

新後撰夏

爲氏

いまは又このふ乃里の忍ふおもあぬとつ
けのそせなきに哉

續後拾遺戀一

八條院高倉

いはぬまを人こせら終みちのく乃このふ
乃里にと先は結てき

新千載戀一

後醍醐院御製

うかりける忍みれ里のこるへ哉かよそぬ中
にまよみちけりそ

後九條内大臣家歌合秋曉望奥しのふの里陸

夫木集

從二位家隆卿

有明乃月の光も鳥乃音も夕やはしのふの里
の秋かせ

寶治元年百首

同

兵部卿隆親卿

徒み露やれくらん人と純すとのふ乃里にれ
くの篠原

同

慈 鎮

夏乃夜の月は清見の關に見る秋はしのふの

里に詠めむ

光臺院十二首

同

前中納言定家卿

郭公とのふ乃里にさとあ純よまゝ卯花の五
月まつよろ

正治二年百首歌

同

權僧正公朝

えちのくのし比みの里の秋風にもちすり衣
打もたぬます

百首歌里盧橋

同

隆祐朝臣

れもひやふ昔も遠れみちれくのこのふの里
に匂ふとち花

家五十首

同秋風抄

光臺院入道二品れみふ

色ふろく誰もこのふ乃里の名を山母とよき
すなくくせとふ

光俊

里乃名も忍ふをきけは山吹れ花さへいはぬ
色よ出ける

信夫森森一作杜

藻蘆草わうとう

納はとよきすこと下草

紅葉れ

しのふ名にそへて

女にこのひるうとふふこと侍けるをれこ
ゆる事れ侍るきは川かはとれる

左兵衛督隆房

い川くより吹くるのせのちあるとむ誰も
のふの杜のここの葉

中納言行平いゑの歌合よ

新勅撰戀

よみ人しらそ

住里はこれ木の森乃時鳥此とたこ意をこる
へありとる

續拾遺戀四

順徳院御製

ことのはも我身とくれの袖れうへにたれを
忍ふの杜れこららと

新後撰戀一

前關白太政大臣

しられとなさてもこれ木の杜れ露もれくな
あさ乃捨てよ見ゆすは

續後拾遺戀一

爲氏

ちらさうとこれふれ杜の下紅葉れもむかぬ

ては色にいつとも

新拾遺戀一

義詮

露も先色よやんでんれもふをいはてと乃
木のもり乃下草

同

法橋東承

しられとあられ木の森の下草に置そふ露は
結不くる共

同

尊圓親王

ちらすあよこれふれ杜のこぎのはに心のれ
くの見ゆも社をれ

新後拾遺夏

順徳院御製

あけやあけ忍ふの杜のよふこ鳥のるにせゝ
先む春あふそとも

後照香院關白

つゝえはぬなまとなりなり時鳥聲をこのふ
の杜乃とと露

同秋下

藤原行房朝臣

このねはやこのふの杜は夕時雨いかにせめ
てる色にいつらん

同雜上

前中納言家兼

得せゝ死にをのかさつ死に頃とにも何と忍
ふの杜になくぬん

顯昭

すゝとさを櫛の葉風に先あてゝこのふの杜
は秋や來ぬらん

國親

い川とかせこのふの杜はこのすゝきひもと
く秋あ成にたる哉

信夫浦

藻塩草奥州人
けめやくま
戀は
に夕あけふのたくあは
をかく

あみ 人しれぬ あまのもしは火

千五百番歌合に栲繩

新古今戀二

二條院讚岐

うちはへてくるに物は人め乃みとのふの
うゑの海士のたくなは

歌合とるにむのころそよえる

同旅

入道前關白

日をへは、都とれふの浦さひて浪より外の
音川此もなと

燒鹽

新勅撰戀一

家隆

人志此す志のみのうらにやく鹽の我名はま
たき立煙哉

續後撰戀二

同

尋はやとみりを何にまらみらん忍みの浦の
海士のもゑは火

續千載戀一

源兼氏

人めれみ志のふ乃浦よをく網の下おはとら
に引こゝろりな

續後拾遺戀一

前大納言經繼

むを忘れす忍ふ乃浦による浪乃名に立へ志
と思むやせせし

新千載戀一

式部卿恒明親王

とせはや信夫のうられ筈比緒の思ひぬゆ
さふ心あるを

正三位隆教

いりにせむこのふ乃浦比興津風りて袖
の色にいてなは

新拾遺戀一

那世親王

人しれぬこのふれ浦の夕とふり思むとほよ

り身まころ純川

建長六年歌合信夫比字ら陸奥

夫木

雅光卿

おもひほゝいくせ浪よ朽ぬらん信夫のう
た乃海士のとくかは

百首歌合五首中

同

藤原為顯

むとれす昔とれふれ字々千鳥友なみ跡に
音おたあかるき

弘安元年百首

法印定圓

ふみそめて今も忍ふれ浦千鳥あどつとあみ
やこゝろあふらん

御集

後鳥羽院

此れよみて信夫れうゑの秋の風けふあらは
れて浪もよきなり

信夫原

或作信夫河原

歌枕裏書云今按考萬葉第七日問答

佐保河爾鳴成智鳥何師鳴川原乎思努比益河

上

人社者意保示毛言目我幾許師奴布川原乎標

結勿謹

此歌只寄河原戀慕之心歟歌枕原部立之條如
何但家隆卿八條院高倉里歌以此本歌詠標結
可思之

洞院攝政家の百首にしのふ戀をよえる

續古今戀一

家隆

人めれみ志のふる原にゆふ志ての心のうち
に朽やはてあむ

夫木集

御集原上露志のふるはら陸奥

後一條入道關白

新拾遺秋上

阿屋入道前攝政

あふはれて露やこほると
忍ちのくろし乃ふ
やはらに秋風そふく

百首歌奉りし時とのふ戀

新後拾遺戀一

源守法親王

あとり川音あなとてそ陸奥乃志のふか原は
川ゆあまるとも

信夫伏拜

今、福島河南坂也前篇信夫河原乃是也

下見萬葉歌

藻盤草夫木六帖

信實朝臣

みちのくろくのうはらの伏拜多ふるきの
あふち陰もあはれに死

古歌集中問答詠鳥歌重出

人社者意保爾毛言目我幾許師奴布川原乎標
結勿謹

信夫渡口

みちのどをへまのりけるに志のふれ郡と
いふ所ははやう見し人と尋とれは志の人
かをかりとるときいて

後拾遺雜一

能因法師

あさち原荒さるやとは昔と人とのふの
わさりかりなり

信夫岡 河内或武藏

草花をよめる

續古今秋上

俊惠法師

何事をしのふの岡のをみかへとおもひ忘
れく露とかるらん

堀河百首志のふの岡陸奥

夫木岡

前齋官河内

志ほるとも知人もなき秋のあはれなるふの
おかの陰草
川、志を

同

頼圓法師

何事をしのふの岡に岩つゝしはて思ひの
色にいづらん

戀の歌中

源 季茂

ひとめれあふれふれ岡の真葛原いほあはそ
れてうらみそめまを

拾玉

慈 鎮

我戀は志のふ乃岡に秋暮てほふいてやふぬ
しのとを薄

信夫瀑布

弘長元年百首志のみの瀧陸奥

夫木

後九條内大臣

入志らぬ道に先と川涙こぼ志のふ乃山の瀧
となるふむ

信夫文字摺

土人言文字摺石今在湍上河上山口村小倉寺
畔往昔好事者磨麥葉于石上則見所思之人影

近郊麥隴爲之就蕪故農夫惡之壓倒其石而埋
于土中其石猶存焉

有安西某者桑折之産也説文字磨石曰其石
東西一丈一尺六寸南北六尺九寸七分地上
高南畔一尺七寸北邊六尺二寸前大守堀田
豆州君招僧麟祥院于洛妙心寺其僧名鰲雲
記之以立石其記曰陸奥國信夫郡毛知須利
石始稱其名不知何時其説亦未詳也只恐萬
世之後人不知其斯石故表而立碑於石傍云
元祿九年丙子夏五月仲旬福島太守紀正虎

表焉右碑詞、文字頗拙、義理不通、况亦其事實
不分明乎、惜哉、今博洽者記之、則識古之遠、猶
視今之近也、豈不遺憾耶

假名字例第四曰、忍文字摺、字古書作鉞摺鉞

金切音也說者曰、未詳、凡ちの冬のとのちのち

ちすりといへるを源融公也、ちすりとい

夫の名物衣に文を摺る也、然文字摺と可

書也と云説あれ共、只又衣の総地に摺と云

心歟

歌林良材曰、ちすり比事

凡ちの冬、此冬のちすり誰ゆへに、た
純んとれも、我あらかまに

右陸奥國の信夫郡にも、ちすりとして、髪を亂

たるやうに摺たる物と、このちすりとい

ふ也

伊せ物うたり

如す、四の、ちすりむらさき、たすり衣、ちす

れ、たれ、ちすり、ちすれ

右武藏野の若紫と、おその、ちすれは、ちすきと

是は春日の里、あてよ、ちる歌、あれは春日野、乃

若紫をつゝと侍りむと云のはとふはあ焼そ
の歌をも古今よは春日野と書りへたりおも
ふ所あるへ志

千載

頼政

おもへともいはて志のふのすり衣心の内
に亂ぬるりか

同

寂然

あちのくの忍ふもちすり忍ゆ色には出
志亂もせざる

清輔

きれふ見志忍ふのあたれ誰ならん心の程
そ限あられぬ

右此歌は宇治左大臣乃末子に中納言大將兼
長冬の春日祭の使にたち給ひを供れ人々色
色の花を折て死らめ死なる中に前右馬助範
綱り子清綱四信夫すり比狩衣を着たりける
心有て見えけきは前左京太夫次の日範綱
るもとへいむやりなる歌也末の世にもれり
志き事は出来よけりとなん
袖中抄第九志のふ文字すり

と云れくの信夫文字摺さきゆへにみよ
んとおもふ我なれあくわ

顯昭云志のふもちけりとは陸奥の信夫郡と
云所にちけりとしてと此とるけりせをる
あり考伊勢物語云むかしてとこうるか字ふ
りしてなれの京春日の里にしろよしてり
りにるにけりその里よいとなま先いたる女
はれあら住けりろのをとこりいま見てけり
れもなれふる郷あいはあさあくとあり
けきと心ちまとひよけりせとあとの着ぬりけ

るあり衣のれそをきりて歌をかたてやるそ
のをとこえのふすりけり衣とあんきたり
けり

かすろれわか紫れすり衣志のよのあた
れりけり志れきす

とあんをひけりていむけりけりつゝあてたも
しろれ事ともや思むけん

とちのを乃しれふもちすり誰ゆへあ亂れ
初あ志我なれあくよ

といふ歌乃心はへなり昔乃人はあをいちは

やきみやひをあんをける

私云武藏野乃わら紫とていひからはる
に是はわら野とよめり奈良乃京乃す乃
里あれはぬより有りむさを野は事はなれ
りらのむさを野とふとあやきそといふ伊
勢物語の歌も古今は春日野と有り思へる
所あるへる

無名抄に云忍ふもちすりとはあちの國の信
夫の郡おみと統とるすりとこれ見たりと
とそ云はぬへとる所の名をやかそそのすり

の名とをいへけくよめるあり遍照寺乃御簾
のへりにもそら統とありを四五寸はわり
きりとりて故帥大納言は清和院の御簾のへ
りよまねはきくありを人は世人見て興せし
此頃はみおやりとら統とうせよとるにや
童蒙抄云もちすりとはあちの國の信夫郡に
をり出せるありうちちあへてみたれはと
をそれり遍照寺のあをすたれはへりあてあ
り

私云先年乃民部卿成範卿左京太夫脩範卿あ

望よいさなはれて西山の寺先くりを侍り！
に遍照寺に詣て侍るかはうれ母や御簾は又
をりの河ると申物にてしのふすりのへりみ
な字せく侍らさりあはをのくみすをれ
りつゝもてかへり侍る又中納言大將兼長
冬は春日祭の使にて下り給ふ供お人といろ
くの花と折てきぬめきなり中に前馬助範
綱の子清綱のふすりれり衣を着り
はるかこゝろありくあわけは故右京兆次
日範綱もを

されみ見あふのふもあすりされあふん忍
ふのみとれりきりえぬ絶す
よの末にたろしき事はいれてきにけり

東史曰基衡贈忍文字摺千端于佛工雲慶云

古今戀四

河原左大臣

あちのくのこのふ文字摺誰ゆへに亂そめに
と我あふなくに

堀河院御時百首歌奉りたる時ともあふの心
とよみ侍ける

千載夏

前中納言匡房

ともしする宮城ヶ原の下露にこのふもちす
りかはく夜をかき

客衣露重といへる心をよと侍たる

同族

前大僧正覺忠

たむ衣あきたけとれ、露とほみと不りも
へす志のふもちたり

同懸一

從三位頼政

おもへともいそてこのふのすり衣おろ乃
内よととれぬる如か

寂然法師

あまのく乃と乃ふもちすりのひ川、色よ
は出たみぬれもする

右大將兼長うそりの祭よ上卿に立侍ける

供よ藤原範綱う子清綱う六位に侍たるに

あ乃よすりの狩衣とれ移て侍けるをおろ

しく見えけれは又の日範綱うもとへさこ

をかせ侍ける

千載雜上

左京大輔顯輔

昨日みと志のふもちたり誰あらん心のはを
あろたりとられ

續後拾遺戀一

後法性寺入道

君よゆくみたれそめぬとくらせとや心の中
にこのふもえはり

千五百番歌合

同

前大納言兼家

い川までかたもひまたれてそくすへは川
あき人を忘のよもちすり

同尺歌

藤原尹信

我爲に憂とこれふのけり衣亂ぬ色やこゝろ
かるらん

新後撰戀一

常盤井入道前太政大臣

色見はぬ是や忘のよのそり衣思ひとたるゝ
そくのくら川ゆ

同

後嵯峨院御製

心の無限とられぬ又たきにていくとと月と
とれふもちすり

續後拾遺戀一

御製

い川れまよみさるゝ色乃見えつらんとのふ
文字摺ころもへすして

新後拾遺戀一

藤原藤經

あゝるこそ絶ぬ思ひのみたるとも色にあい
てそ忍ふもちきり

同秋上

頓河法師

宮木野の朝露わけて秋萩乃色にみさるゝし
のふもちずり

後のいろは歌戀部

外集

定家

みちのくの志乃ふもちずり見たれつゝ色に
も戀と思ひそめてき

光明峯寺入道攝政家歌合行路見戀

夫木

從二位家隆卿

志ぬれとなとのふの衣ゆれずりの人めは如
りよみたれわふとは

家集戀歌中

同

同

移り來と心乃色ぢまされけりひとりとのふ
のころもへにけり

久安百首名所硯箱

同

前參議親隆卿

人と絶れすれは冬ろまをみちのくは信夫は

もとも何よりはせむ

六百番歌合

同

隆 信

衣くみ移りし色はあたあまを心そふかき
忍み文字をり

磐手信夫是亦古來相連續之詞

新古今雜下

右大將賴朝

陸奥乃いはてしのふはえおたらぬかきゆく
あぐよ壺の石よみ

續千載戀一

前内大臣

人しきぬ袖のなきたやみちのくのいはて忍
みの山のした水

續後拾遺別

大納言師氏

別路はげふを限とみちのこのいはてまのふ
まぬるゝそてゝか

信夫鷹下歌共見于前篇然以鷹類集載于此

人くによませ侍とる百首の中あ

續古今戀一

中務卿親王

陸奥の信夫の鷹の冬籠りゆりにもあぐとれ
もふこゝると

夫木

能因法師

みちのく乃信夫比鷹と手にすへて安達の原
とゆきはさり子を

建久二年左大將家歌合鳥部

定家

信夫やま阿さちれをくにかふわこのそ乃羽
さかりや人にしゑるゝ

佐藤莊司館

上飯坂村西在天王寺中野村之間稱大鳥城郷
人謂之丸山城有寺號瑠璃山吉祥院醫王寺修

禪宗莊司父子古墓牌子有之奥將院鐵山宗真
莊司元治墓銘也長五尺廣一尺七寸厚一尺光
明院玉華昌蓮婦人墓也長五尺廣二尺六寸吉
祥院八過次信次信墓也長七尺五寸廣二尺六
寸厚五寸傍有元曆元年三月十八日字請光院
劍勝忠信忠信墓也尺寸相同寺中藏義經笈辨
慶親筆大般若一卷唐鏡燕子等

或曰莊司古墓在出羽白岩田間有寺號彌勒
寺後山謂之丸山城

夫中華之有謚法也以其文字而千載之後分

明考其人一生之心術功業可謂的實嚴明者也本朝欽明帝以降王公大人士庶凡下化異教是以人之於身後必也委身于佛氏假手于浮屠於是乎其名號大亂其字義頗戾其道理併亡其入之心術功業也尤甚矣夫次信忠信之於仕途共盡其所使之道致死于至忠兒童走卒亦能知之然見此墓銘卑俚凡俗失之之中復失其義實可惜哉

憂思山

福島西南有一山鄉人稱吾妻嶽是乃於和歌而

號憂思山者也

六帖

赤人

見てたれもひとすてたれもむ大かさは我身
むとつは物おもひの山

六百番歌合

顯昭

年をへてこころをたれをこりもせうかとふ
かへらぬ物おもひのやま

箭筈嶽

在吾妻岳東土湯邑西北

安達郡

東史曰藤基衡贈安達絹千匹於佛匠雲慶云
安達

大歌所御歌

古今

みちのくの何さちのまゆみ我むのは末さへ
よりおとれひくりに
八月駒迎をよえり

後拾遺秋

源縁法師

陸奥の安達乃駒はあつめともなふ何ふさりの
關まてはきつ

按往古良馬出于此地而備貢獻者可見
小一條右大將にあつれ賜ふとてよえてそ
へて侍りたる

同雜三

源重之

みち乃く乃あさちのまゆみむくやせて君あ
我身をまゝのせり哉

按藤忠平乃昭宣公基經子實頼師輔父也
醍醐帝延長五年奉勅上延喜式五十卷村
上帝天曆三年正月辭大政大臣致仕八月
薨年七十歳贈正一位封信濃侯謚貞信公

號_二小一條_一或稱_二批杷_一左大臣是也

のぬれむ侍りける人乃もとにみち此國よ
り弓をつらははにとてよみ侍ける

同雜五

藤原實方朝臣

みちのくのあさちの眞弓君にこそ思ひと先
たるおせもかたふ先

按_レ往時此郷出_レ良弓_ヲ用_ニ之_ヲ邦國_ニ者也

宇治前太政大臣白河にて見行客をいふお
をを

堀河右大臣

關こゆる人にをは、やあち乃くのあさちの
まゆえ紅葉とよれや

寶治百首歌奉_ルる時寄弓戀

續後拾遺戀三

後深草院辨内侍

陸奥のあさちのまゆみ末川るよあらぬりた
にちひくこゝろりか

風雅戀三

三條院藏人左近

是や此あさちのまゆみ今おせはおもひため
たるこそもりたらめ

光明峯寺入道前攝政家十首乃歌合に同心

と

新拾遺戀五

後堀河院式部卿典侍

人はいさあたちのまゆみせと返し心の未せ
いかにさ乃まん

同

中國入道前太政大臣

我にかひく契なりともたのまれとあたち
まゆとあさこころは

新後拾遺冬

法印守遍

かむなとやはや七十ふまきのく乃安達乃ま
ゆん春にあふとも

同戀四

藻壁門院但馬

今はたゝあさちの真弓むくてにもあはる心
の程そしゑるゝ

名所百首

定家卿

控なとより霞や空よひ控くらんあたちま
ゆみ春は隣りと

順徳院御製

霜はとさあたちまゆみちりはてゝのこら
ぬ色を何とのむゑん

最勝四天王院名所御障子阿立原

從二位家隆

狩人のあさちれまゆみ未ぬはみよるやをこ
りの秋に紅葉は

安達原野 一作阿立原

阿武隈上流經此原野而過其河東謂之安達原
其地有巨石長一丈石面可六七尺土人呼曰白
檀相傳義家朝臣征東夷時躡木屐而登石上射
而殪夷賊賊徒甚畏之去今屐痕存于石上

按白檀鄉老說如斯怪其妄說若實然則右大
臣從三位光俊等詠紅葉零落之句可謂非乎

蓋曩昔之喬木化為石乎外國亦多此類矣且
夫詳歌句及實方辨內侍左近典侍等所言則
實為鄉里所出之良弓焉想夫白檀亦造弓之
木乎未可知俟識者可辨之

石東南印三足址于原上義家射于石上從者走
拾其矢之痕也一步阻十六七町曰三步原
藻鹽草あさちれ原こわられるまゆるみつかに鬼
露しくれ鹿

拾遺戀四

よみむせしらす

凡ち乃く此安達の原のこゑまゆみ心こはく

も見ゆる君のな

みち此國比あさち野に侍る女に九月は
りりに川かはあたる

新古今戀五

源重之

れもむやるよその村雲あく此川、あさち此
原の紅葉あぬらん

嘉元百首歌奉りたる時

續後拾遺冬

贈從三位爲子

なよりかたあさちの原乃霜枯にまゆみちり
ゆくころのさむしさ

題とゑす

夫木冬

能因法師

陸奥の信夫の鷹を手にそへて安達乃原をゆ
きは誰り子抱

最勝四天王院障子に安達原

新續古今秋

定家

しを統ゆくあたちの原の薄霧にまさちりは
て秋抱乃あ統る

名所百首歌合

家隆

玉夫のあさち乃原の白真弓ひまもやそを

暮る歳あか

生駒と

夫木春

後徳大寺左大臣

安達野の野澤のますけもけふあけりいほゆる
駒乃ととたるとも

最勝四天王院名所御障子

同秋

如願法師

安達野に秋風そよくむら薄憂物をくや鹿の
あくとん

久安百首

同

前参議親隆卿

阿たま野の尾花かく北に母のみゆる薄やと
りのとる志成らん

建保三年名所百首あさち野陸奥

同冬

正三位忠宣卿

安達野も雪降まけり狩人れむかぬ真弓の末
さはむ迄

同秋

寂蓮法師

をしろあく安達に原は紅葉きて色にあら
ぬとけくまの松

建保三年名所百首歌

同冬

正三位家衡卿

ふくれゆを安達の原に白まゆみえらす木の
葉は散はてぬらん

物名

續後拾遺

觀意法師

分託ぬ露のみとけき安達野をむとりかはら
ぬ袖をりり川

新撰六帖

光俊朝臣

朝霧のたな引み統は阿たち野のまゆみ色川

をくくれさへふる

黒塚

安達原上有二堆塚往昔那智東光坊所闍梨祐
慶者抖撒假宿于此地主婦練焉深更采薪山中
祐慶怪之時其亡而見房中積骸如山驚而出走
追之急祐慶以法術脱去其塚猶存居宅址也
とち乃國名とり乃郡黒塚といふ所お重之
り妹あまゑありと聞つとていひつりとし
とる

拾遺雜下

平 兼盛

みちのくの安達の原比黒塚に鬼こもれりと
死くは誠り

大和物語にやねもりとちの國にて閑院の
三れみこそ女の女ありなる人黒門かぞ云
所は侍なる其娘ともれとこそせたりなる
とちのくれあさちの原れくろつかは鬼こも
きりときくたまことか

といむさりけり如きてせれむを先をいん
といむはれを親まぬいとわかかかんあり
いまさるへからんれりにをといひけれを

京にいくとく山ふれは川にて

花盛過もやするとかはつなをるての山ふき
うしろめたしむ

をいひたりかくてあとり乃みゆといふ事
を恒忠のきみの女よ見たりなると云なん
此塚れあるとありける

たほせらの雲れかよひ路見てし如あとりれ
あゆはは跡はりもあし

建保百首

夫木

從三位行能

わがためは是やあぬちの黒塚に冬草ひけて
人そいりけり

新六帖

同

爲家

安達野の原の黒塚鬼あめくころにをとも
よを過さはや

百首歌霞

夫木

寂蓮法師

こせりつむ春乃山田の黒つかにあちれま
ゆみ霞とあひを

吾田多良嶺

作吾田多良野

是乃二本松西嶺也土人稱之二本松岳夏六月
望日祭之郷黨守夜終宵群集未詳祭何神也

歌枕名寄云安太多良嶺範兼卿類聚部野立之
或抄云嶺也云云

藻鹽草十七あたゝ野あうしうすむしか
能因歌枕云あたゝら終有神峯也

寄弓

陸奥之吾田多良真弓著絲而引者香人之吾乎
事將成

陸奧國相聞往來歌

安^ア太^タ多^タ良^ラ乃^ノ爾^ニ爾^ニ布^フ須^ス思^シ之^シ能^ニ安^ア里^リ都^ツ都^ト毛^モ安^ア禮^レ
波^ハ伊^イ多^タ良^ラ牟^ム爾^ニ度^ト奈^ナ佐^サ利^リ曾^ソ爾^ニ

譬喻歌

美^ミ知^チ乃^ノ久^ク能^ニ安^ア多^タ太^タ良^ラ未^ミ由^ユ美^ミ波^ハ自^ジ伎^キ於^ケ伎^キ氏^シ西^シ
良^ラ思^シ馬^マ伎^キ那^ナ婆^ハ都^ツ良^ラ波^ハ可^カ馬^マ可^カ毛^モ

